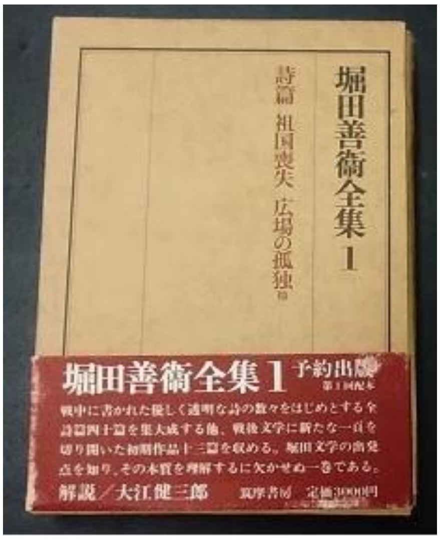
essais こころみ　2020年3月

（再掲）2019年4月1日（月）朝のうちは晴れ、新元号発表「令和」
『堀田善衛全集』見なおす試み

堀田善衛全集（筑摩書房　1974年6月20日発刊開始）



2020年3月3日（火）　晴れ

人の少ないうちに電車に乗ろうと、今日はとびきり早起きし、7時20分には事務所へ着いた。新型肺炎、専門家会議の分析が昨日発表されて、状況が少し見えてきた。漠然とした不安感はちょっと和らぎそう。

―　過去が本当に〈過去〉になる瞬間　―

新型肺炎の広がりで、外出する仕事の予定が中止になるなどした。空いた時間をうまく使うことにした。日頃あまり収集しない情報を検索したり、あまり読まない分野の本を図書館に予約したり、自分の〈自業〉史用のファイルを見直し、新しくファイリングし直したり。

そうこうしていて、あらためて気づいたこと一点、そして大きく気づいたこと一点。まずは、〈あそび〉の時間を持つことは、やはり大事だということ。時々自分の周辺以外のことに目をむける、いまルーティンになっていることを見なおしてみる。けっこう小さな発見があるもの。

そしてもう一つは、過去の大きな出来事の一つが本当に〈過去〉になったということ。自分の歩みを記録しているファイルを見直して、順次更新してきた文書の最近版に、過去の大事な一出来事が記述から抜けていた。かつては一大事だったのに・・・。

ここ最近ではすっかり頭から離れていたんだと、今さらながら気づき、我ながらビックリ。すぐに文書類を遡ってみた。2010年のものにはちゃんと記述があった。2000年前後の出来事だから、20年経って、本当に〈過去〉になった、その瞬間だった。感慨深い。

一方で20年を超え、何十年もずっと記憶して、ずっと記録し続けていることがある。その違いはどこにあるのか。まちがいなく、根本的なところ、自分の本質的なところで通じていること。過去から未来にずっと記憶し続けることと、過去が過去になることと、それら全て、人の生

2020年3月7日（土）　晴れから曇り

梅から桃、桜へと華やぐ春。新型肺炎はまだ広がりをみせる。今年のお花見は宴会自粛の動き。オリンピックイヤーの2020年、まさかこういう展開になろうとは。

－　「見直し」作業の収穫　－

諸々の中止やキャンセルで浮いた時間を、「見直し」作業に使う今日この頃。これがけっこう収穫。

ずっと使わずにおいてあった皮のペンケースを眼鏡ケースに仕立てた時は、すばらしい！と自画自賛。

もともと文具が好きな方。独立してからは仕事道具にあれこれ買っていた。そのうち使わなくなったものをこの機に使うものにした。

やってみると、どうして今までこうしなかったのだろうと思うほど。「見直し」はそれなりにしている方、でももっと広く、「見渡す」のがよいよう。

自分の大事な記録ファイルをファイルし直そうとして、クリアファイル一つ選ぶのに、感覚的なものを重視している自分に気づいたのも収穫。

一旦は中身の見えないものを選んだが、ちょっと違う。中が見えなさ過ぎて、いつも見えるところにあっても、心理的な距離感あり。

まったく透明では、あまりに明け透け。そんなこんな、迷って、結局すこし細工を施す。これで頭もすっきり、ファイリング。

小さいながら、いろいろと収穫があって、自分ではにんまり。

2020年3月16日（月）曇りから晴れ？

今日はまた寒い。でも木曜はぐっと気温が上がるらしい。明日は彼岸入り、「暑さ寒さも彼岸まで」。

－ やはり残している･･･記録 －

3月7日にNHKBSで、読売新聞社のかの主筆が初めてメディアのインタビューに応えたという番組があった。録画しておいた。今回は昭和編とあったから、平成編が続くらしい。

93才、時代の生き証人の一人、感心しながら観た。本当にドラマティック。知人の今年90才になる人生の大先輩の若い頃の話を聞いた時も同じような印象をもった。

番組には、主筆室に入る場面もある。広い部屋の壁面いっぱいの書棚におさまっている。そこにはご当人がずっと残している文庫本がおさまっていた。

それを手にとる。茶褐色で端はぼろぼろ、開くと、ぱらぱらを崩れ落ちそう。"それでも、やっぱり、残しているんだ・・・"。捨てることはぜったいできない本、人生の記録。

捨てるものはたくさんあったと思う。でも、絶対に捨てることのできない、捨てるわけにはいかないものがある。なんとなく、共感してしまったが、続きの平成編をみてまた何をおもうか。

2020年3月20日（金）　春分　晴天

昨日大阪府知事が会見して、大阪と兵庫の往来を控えるようにと呼びかけた。専門家の助言とか。桃が咲き、桜も例年より早く咲き始めて、今日は春分。せめて自転車で春散歩。

―　このたび思い出す、『沈黙の春』　―

レイチェル・カーソンの『沈黙の春』を知ったのは1989年のことだった。読売新聞の元記者の方から教わった。4月に入学した大阪YWCAの社会人対象コースには多彩な講師陣がいた。その内のお一人だった。

1989年といえば、8月に天安門事件があった。授業の時に熱っぽく解説してもらった印象が残っている。『沈黙の春』は何の話から出たんだったか、すっかり忘れてしまったが本は読んだ。

読んで思ったことは、多くの人が頭の隅ではわかりながら、一度便利でモノの豊かな社会に慣れてしまっては、もう後戻りできないのだということ。くずれた生態系は元に戻らず、細菌との攻防は終りがない。

今回の世界的な事態について新聞ではさまざまな論説が載っている。それらを読みながら、今朝ふと思った、ひょっとすると、各国の対応策の先に「ベーシック・インカム」の導入が本格化するかもしれない…。

環境問題についても、グレタさんの活動がいかに現実的であるか、世界のリーダーたちが再認識することになるはず、とは少し希望的観測にすぎる？

2020年3月21日（土）　大阪城公園　桜開花！

2020年3月25日（水）　晴れ

　風はつめたいが、昨日今日とよく晴れている。21日に大阪城公園で桜の開花をみた。大きな木に本当に一つだけ。昨日の帰り道にうつぼ公園へ寄ったら、もう４分咲き。今年をきっかけにぜひ風情をたのしむ、お行儀のよいお花見が定着しますように。

―　「街角のピアノ」をうつくしく　―

　テレビのチャンネルをおくっていて、たまにNHKBSの街角ピアノにあたる。人の行き交う駅や空港においてあるピアノ。誰でも弾いてかまわない。時間つぶしにちょっと弾いていく人、旅の想いを託す人、等々。

　ピアノのある空間の空気感、その都市の文化性、人々の佇まい、弾く人の雰囲気、そういったものがつながりあって、広い地球の、多様な人々の、誰一人として同じでな生が、今まさに行き交っているその瞬間を切りとった、そんな感覚を持つ。なんともうつくしい一コマ。

　最近日本でも街角ピアノの動きがあるのか、昨日久しぶりに大阪駅ルクアの地下を通ったら、ピアノの不連続な音が響いていた。何ごとかと思いきや、エスカレーター横にピアノが置いてあって、側に若いママ二人がおしゃべり、子ども２人が並んで座りピアノを叩いていた。

　“そんな風にするものじゃないですよ”、上りエスカレーターを乗りながら首をかしげた。せっかくの街角ピアノ、街のいい風景に、もっとうつくしく。

2020年3月28日（土）

大阪城公園。
　この日はクレオ大阪東館で午後から起業相談。5年間の事業が今年度で終了となり、起業相談もこの本日をもって終了。よって、その前の時間を使ってやっていたensのランチミーティングも自動的に終了。

　起業相談は「新型コロナウィルス肺炎」の感染ひろがりで、自治体から外出自粛要請もあってか、申し込みななし。おかげでというか、ランチミーティングはたっぷり時間をとって、11時すぎから午後3時まで、いろいろを話し合ったのでした。

　その前に、桜も咲き始めて、観光客も少ないので、大阪城公園を散歩。かつてなく、静かで、風情ある桜散歩になりました、お天気はイマイチでしたが。

2020年4月1日（水）メモ

　2月の段階では、まさかオリンピック延期なんてね、と話していましたが、本当に延期になるほどの事態になりました。今日午後のBBCニュースをチェックすると、国連総長が、「第2次大戦以来、最大の試練」と語ったそうです。たしかにニュースが伝えるアメリカ、イタリア、スペイン、フランス、イギリスの先進国や途上国の状況をみると、そう思わせます。「コロナ後」の世界はどうなるか、どうするか、議論され始めました。10年度の2030年の世界はどうなっているでしょうか。